

発災後も休めない**医療機関**・**福祉施設**の

BCP **業務継続計画**
Business Continuity Plan

BCM **業務継続マネジメント**
Business Continuity Plan

BCP策定が

いまあるBCPを

初めて * **見直し**

**脅威
定義**

**目標
設定**

**現況
把握**

**計画
策定**



ご要望に応じた
様々なタイプの
BCPを策定。





脅威の評価



脅威とは危害を生む事象です。総論として地震は脅威ですが、断水や停電など各論にも注目すべきです。例えば、地震が外来診療の脅威になるか評価する場合、発災時刻や曜日を変更すると結果に影響します。停電と人工呼吸器を評価する場合も同様に、同じ病院内であってもICUと療養病床では異なるでしょう。当社では独自に実験する事もあります。停電と冷凍庫の関係を調査した結果、開閉しなければ1~2日は0℃付近を保ちました。すなわち、数時間の停電は冷凍庫にとって脅威ではない可能性が示唆されました。初めてのBCP策定では漠然としがちですが、脅威を精査することでBCPはリアリティを増します。



危害最小化と事業継続



海底火山と富士山の噴火、いずれもハザード(危害要因)ではありますが、脅威評価すれば富士山噴火のリスク(危害)が過大と出るでしょう。すなわち、危害が及ばなければ脅威ではなくなる訳です。消火訓練や避難訓練を繰り返すのは、危害を最小化する狙いがあります。対応力を磨くリスクマネジメントです。それ以前に、危害の芽となるハザードを見つけて摘み取れば、さらに危害を遠ざけられます。BCPでは脅威を定義します。全職員でリスクを想定し、1つでも多くの対応策を習得すれば危害が減る可能性があります。事業継続の妨げとなる危害を減らすための人材育成が求められます。



秩序と良心に基づくGOA



業務標準化はミス低減や再発防止、途中交代の円滑化、物品共通化など業務効率や安全性が向上します。阻害要因が多重化する非常事態をすべて網羅するマニュアル整備は容易でなく、都度参照する余裕もありません。そこで当社では目標志向活動(GOA: goal-oriented action)を推進しています。喀痰吸引器が使えなくても『痰を取る』ことはできます。標準業務手順は逸脱しても結果は得られます。自己判断の範疇、リスク&ベネフィット、代替手段の選択肢、演習を繰り返す事で関係者で共有する事ができます。指示待ちの余裕がない非常時、自信を持って自己判断できる環境づくりが求められます。



自律的活動と創造的連携



平時の医療では薬剤・ME・給食などは専門分化されますが、非常時には物資班として包括する方法があります。職種や年齢性別などの属性ではなく、目標志向で人員を配置し、不足するリソースを補います。業務が可視化されていれば他職種でも『私にもできる』『その時間は人を集めよう』と能動的に支援しやすくなります。院内での連携が指示や命令による物ではなく、自発的な連携が創造されやすくなります。時系列で予定・実績を管理するクロノロジー(chronology)は、院内での受援要請にも応用できます。文字や図画などの視覚的情報共有に慣れるトレーニングと、声を掛け合える人間関係が重要になります。

マネジメント(BCM)研修サービスの事例

座学型講義



ワークショップ



図上演習



発売元

NE S株式会社 (エヌイーエス)

所在地 兵庫県伊丹市野間5-10-13

URL <https://24med365.net>

メール info@24med365.net

登録電気工事業者
兵庫県 第300333号

